

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患政策研究事業）
分担研究報告書

軽症例の実態調査に関する研究
研究分担者 坂本 崇 国立精神神経医療研究センター

研究要旨 認知行動療法(CBT)遺伝性を含むジストニアに対する活用を検討した。

A. 研究目的

医師・患者への啓発に伴って、以前は放置されていた軽症例のジストニアも正しく診断されるようになった。しかしながらこうした軽症例では、内服治療・ボツリヌス治療の効果よりも副作用が上回るものと考えられ、適応がないと考えざるを得ない。軽症例に限らず一般に、ジストニアにおいては心理的要因の関与が症状の増悪を来すことはしばしば経験する。こうした心理的要因のコントロールのために、認知行動療法(CBT)を活用することを検討した。

B. 研究方法

ジストニア患者に対する心理検査結果を検討したうえで作成したCBTプログラムを作成した。通常の内服治療やボツリヌス治療で改善が得られたものの症状が若干残存して治療への満足度が低い者・そもそもこうした治療の適応となりにくい程度に症状の軽微な者を対象として希望者を募り、心理評価を施行した。一定の基準を満たすうつ・不安の強いジストニア患者10名が研究対象となった。8セッション1クールを完遂した研究参加者は7名、残り2名は施行中、1名は本人都合で中断した。

(倫理面への配慮)

本研究は当院の倫理委員会承認を受けて実施された(A2014-95、A2015-97)。

C. 研究結果

CBTプログラムを完遂した7名についてはCBT実施後にSF-36v2の「身体機能」・「日常役割機能(身体)」,「全体的健康感」、WHOQOL26の「身体的領域」・「心理的領域」・「環境」・「QOL平均値」、STAYの「状態不安」、GRID-HAMDの「総得点」およびジストニアの「機能障害スコア」で有意な改善を認めた。CBTによって好ましからざる影響が出現したものはなかった。全例が自覚的にジストニアに好影響であった。

D. 考察

ジストニアに対するCBTは、うつ・不安の強い患者に対して有効である。CBTはインターネットベースでの配信可能性を探っており、ジストニアの治療においても有効であるとすれば医療の均てん化にも極めて有意義な媒体と成り得ると考える。

E. 結論

特に軽症例のジストニアにおいてCBTは有効である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

H. 学会発表

なし

J. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他